



TITLE:

北米旅行記

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 北米旅行記. 天界 1933, 13(150): 375-389

ISSUE DATE:

1933-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165428>

RIGHT:

# 北 米 旅 行 記

山 本 一 清

( 1 )

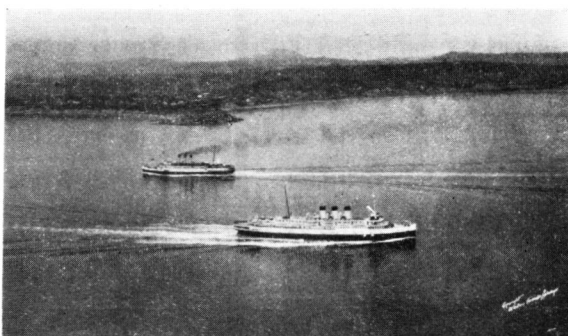
第五回太平洋學術會議 (Fifth Pacific Science Congress) へ我が日本からの代表として出張すべく學術研究會議で自分が選ばれたのは 去る三月24日であつた。それから急に種々の準備をしたが、四月20日になつて、外務省から公用旅券が下附され、同30日には、東京一橋の學士會館で、學研議長櫻井博士主催の日本代表送別宴があり、其の後、まもなく15人の代表たちは便宜の船に乗つて大平洋を越えられた。自分は始め五月12日頃に横濱を出帆する筈の M.B.K. の箱根山丸に便乗する豫定であつたので、五月9日の夜に京都を立つて、まづ東京へ着いたが、船のスケジュールが急に遅れる 報知を受けたので、止むなく、13日午後2時横濱出帆の A.M. 汽船 President Cleveland に乗り込んだ。乗つて見ると、圖らずも、同じ京都大學から同じ學術會議に代表として出席する地質學者横山次郎博士が乗つてゐられたので、相共に大喜び、尙ほ、出帆後、此の船には東京の實業家山崎氏も乗船してゐられることが知れたので、歐米人30人、支那人12人、フィリッピン人 1人の中へ、日本人が3人——この3人は何れも皆始めから『自分は唯獨りの日本人客かも知れない』と覺悟して、多少の心細さを感じてゐたのだから、意外の喜びと心強さを語り合つた。

船は16000トンの巨船なので、横濱出帆後の一兩日僅かばかりのゆれを感じた外、彼地に着くまで前後約10日の航海は、誠に平穩な波の上であつた。天氣は、曇りや霧の日が多く、星も太陽も殆んど見えなかつたので、別に、興味を以つて觀望するほどの現象も無かつた。楽しみにしてゐた綠尖光さへ、一回も見えなかつた。それで、毎日、夜は早く就寢し、朝は朝ね坊をするといふ呑氣な生活で、只、晝の間は、書物や雜誌を讀む以外に、學術會議のプログラムを研究したり、公私文書を整理したり、二つ三つ彼地で發表したい論文の準備をしたり、原稿を練つたりした。太陽活動や、流星や、幕末天文

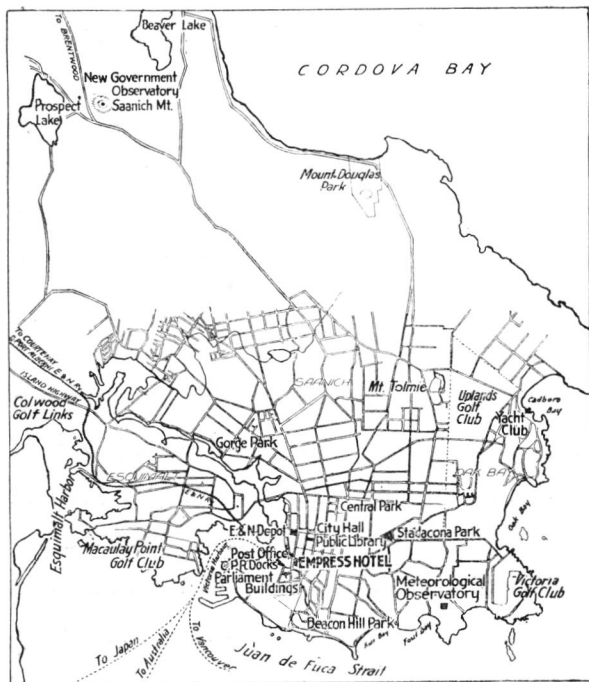
史などの論文内容を再調したり、計算をやり直したり、遂には、歸朝後の秋の広島での諸會合に読む文の想を考へたりした。—— こんな有様で、いくら忙はしくもあり、又、心の落付きもなかつたので、不本意にも手紙を書かず、又、新しい原稿も怠けて了つた。

五月十八日には大洋の中で日附變更線を通過したため、同じ日を今一度“Meridian Day”として送迎した。

船は、急ぎの商品をドツサリ積んでゐるとかで、始めから速度は毎時20マイル前後を出し、結局、着港予定の日よりも



ビクトリヤ港外



MAP OF VICTORIA, B.C., AND ENVIRONS

バンクーバー島の南端、ビクトリヤ市附近地図

一日早くプログラムが進められて、五月21日の夜に Juan de Fuca 海峡に入り、翌日早曉 Victoria 港外に假泊、まもなく Pilot が乗り込んで、検査を受けてゐる間に船は Victoria 港に着。移民官や税關の手続きを終り、横山氏と自分とは無事上陸。横山氏は Empress Hotel へ、自分は十年前お馴染みの

Dominion Hotel に宿泊することに定めた。

（ 2 ）

學術會議は六月1日から開かれるので、こゝに一週間以上の餘裕があつた。そこで、兎に角、天文臺の舊知に會はうと思ひ、Victoria 到着の日、直ぐに臺長 J. S. Plaskett 博士に手紙を書き、來意を通じた。會議のプログラムに據ればこんどの會議の天文課長は Plaskett 博士なのだから、公私兩方の意味に於いて同博士と連絡して置くことは必要であつた。五月23日朝、Plaskett 臺長はホテルに自分を來訪せられたので、折から來合はせてゐた 槇山教授にも紹介し、翌日から毎日、臺長か又は臺員の誰かの自動車で天文臺を訪ねることにした。

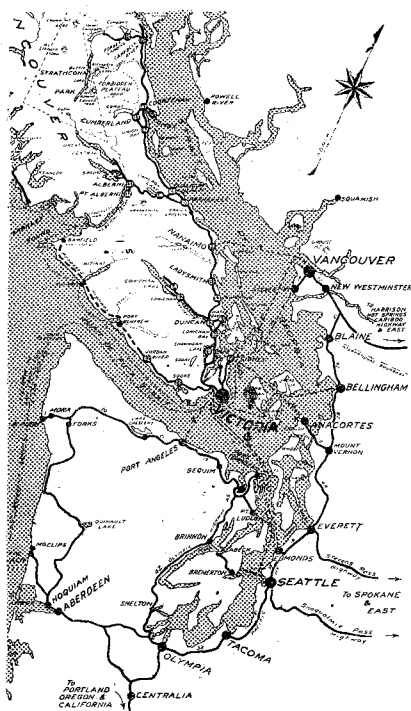
Victoria の天文臺は、正式には Dominion Astrophysical Observatory と呼び、1913年に計劃され、1918年落成したものであつて、口径183糎の大反射鏡赤道儀を唯一の器械として、創立以來、専ら恒星界の研究をやつてゐる。職員は、現在、

臺 長	J. S. Plaskett
臺 員	W. E. Hatper, J. A. Pearse, C. S. Beals, F. S. Hogg, Mrs. Hogg.
計 算 係	S. N. Hill, 秘 書 Miss Blake 園丁 某

こうして、小ぢんまりとした良い天文臺である。場所は Victoria の市街を北へ10哩ばかり離れた Little Saanich Mountain といふ高さ200米の丘上で、晴れた日には Victoria 市の内外は言ふに及ばず、Juan de Fuca 海峡を越えて、白雪を頂く Olympic Mountain 等の山々も見える。

五月中、自分は殆んど毎日この天文臺に通つた。往復は常に Beals 氏や Hill 氏の車に乗せられた。天文臺では、圖書室で、新着雑誌や諸報告を見たが、特に北米に於ける最近十年間の天文望遠鏡や寫眞レンズの研究、昨1932年末の獅子座流星群の觀測綜合、恒星スペクトル分類法の趨勢等に時間を費した。其の間に、時々、臺長や Harper, Hogg 夫妻等の歡待を受け、Beals 氏には測微光度計其の他の新設備を見せられ、計算者 S. N. Hill 氏とは、一夕、支那問題を論じた。——ノンビリと、誠に落ち付いた(殊に、後日、會議が始まつてからの多忙な日々と對比して)愉快と幸福に恵まれた日の連続であつた。

## ( 3 )



Juan de Fuca 海峡あたり略圖

のドライブ、Esquimalt 軍港見物、それから市内へ歸つて、Oriental Home と Miss Martin の貴い事業の參觀等は忘れられぬものであつた。其の他、日曜や其のほかの日、第二世の青年たちや日本語學校生徒たちに幾回も接近したことは珍しい経験となつた。

五月27日、此の日は自分の誕生日であるが、恰も此の日、米國のシカゴ大博覽會が開會式を舉行し、ゴクトリヤ時刻の午後5時から、Arcturus 星の光りによりスキッチを切る儀式が放送されるといふ此の事は、自分が船中に見た一雑誌の記事で知つてゐたので、此の面白い出来事を、獨り靜かに楽しむべく、午後5時、小倉氏宅のバーラに駆けつけた。シカゴ市は今から正に40年以前即ち1893年に Columbia Exposition といふ大博覽會を開いたことがあるので、今年の大博覽會は實に40年振りのものである。故に今回の開會式には

ゴクトリヤに滞在中の、學術會議開會前十日ばかりは、毎日が實に楽しい生活であつた。天文臺では星を楽しみ、宿へ歸つてからは、在住日本人の方々と親しく交つた。

五月29日(月曜)午後3時から、天文臺の圖書室では例週の Colloquium が開かれ、自分は臺長のすゝめによつて、日本の天文學界の話を2時間ばかりもやつた。後には種々の質問などが出て、愉快であつた。

在住日本人の老人から青年少年まで、男にも女にも、度々會つたが、始終熱心に世話をして下さつた小倉牧師夫妻には、感謝の語が無いほどである。市の内外の散策、殊に、五

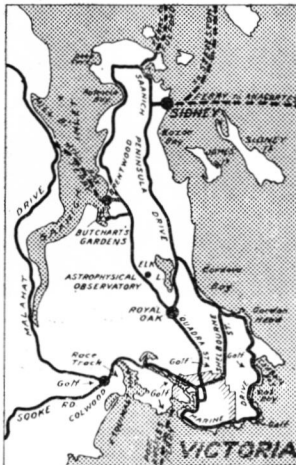
月31日、午前中から Malahat 方面へ

光達距離40年の Arcturus 巨星(牧夫座  $\alpha$  星)の光線をフォトセルによつて電流に變へ、それで、開扉のスイッチを切るといふプログラムを、ヤークス天文臺長 Frost 氏が提案したのである。——放送に聞き入つてみると、Arcturus の観測のためには、萬全を期して、Harvard と、Pittsburgh と、Urbana (Ill.) と、Yerkes (Williams Bay, Wis.) と、4ヶ所の天文臺の、それぞれの大望遠鏡の接眼部に光電管が取り付けられ、其れからシカゴ博覽會の Hall of Science に設けられた式場まで電線で連絡された。そして、先づ Frost 博士が立つて此の儀式の「宇宙的意義」を説明講演し次いで Planetarium 部長 Fox 博士が Harvard, Pittsburgh, Urbana, Yerkes の順番に、各天文臺を呼び出し、星よりの光電流を送らせたのであつて、幸ひに此の日は各地の天氣が好かつたため式は多大の成功を納めた。殊に、自分にとつては、既知 Frost, Fox 兩氏の肉聲を、實に十年ぶりに聞くことが出来、獨りで胸を跳らせた！

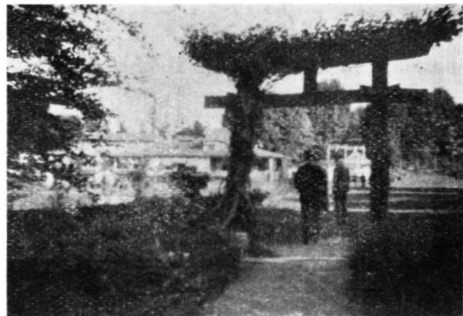
## ( 4 )

學術會議は六月初から開かれるので、自分は五月31日に Dominion を引き拂つて、Empress Hotel に移つた。日本からの代表同僚や諸外國からの代表も亦殆んど總て此の日には同じ Hotel に到着され、Hotel の内外は急に會議の空氣が濃厚となつた。會議の事務所も開かれた。そこで Register 其の他の届出等を運んだ。

愈々六月1日午前9時、Hotel の大舞踏場に於いて開會式が行はれた。まづ、今回の會議の議長である H. M. Tory 博士(カナダ



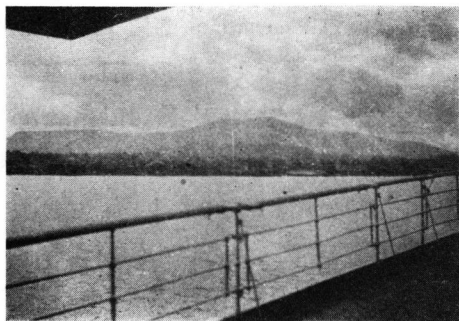
Saanich 半島



ブチャート花園

National Research Council の議長) の開會の辭あり、次で、British Columbia 州の知事 J. W. F. Johnson 氏の祝辭、それから、日英米佛蘭等の國々の代表者の挨拶があつた。正午は、ホテル内で、州廳主催の午餐會、午後は代表者一同がバスに分乗して、まづ Saanish 丘上の天文臺を參觀し、次で、有名な Butchart 花園を參觀、夕刻歸宿した。夜は評議員會。

六月2日。午前中は事務總會と常務委員會。正午にはボクトリヤ市主催の午餐會。午後には日本代表のため、語學校で歡迎會があつた。

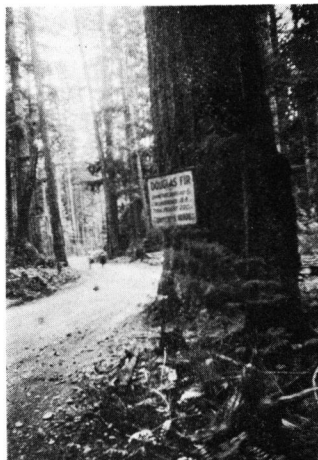


船中よりナナイモを見る

六月4日（日曜）。此の日は會議全體が Victoria から Vancouver へ移る日である。朝一同荷物をまとめ、午前9時、特裝された C.P.R. 汽船 Princess Louise に乗り込んで Victoria 出帆。海の景色を賞しつゝ、午後3時 Nanaimo に寄港。上陸して、一部は生物研究所を參觀したが、自分等はバスで Cameron 湖畔を越へ、Cathedral Grove の大森林へドライブした。

午後5時、再び船に乗り、Nanaimo 出帆、船中で晚餐を取り、8時過ぎ、電飾にかざやいた Vancouver に着、直ちに Hotel Vancouver に入つた。

六月3日、午前9時から第一回 Symposium、第一部は森林學、第二部は農學。午後は3時から知事官邸で園遊會、夜は7時からホテルで大晚餐會——ボクトリヤに於ける最後の大プロであつた。



カセドラルグロヴの森林

( 5 )

六月5日から同14日までは Hotel Vancouver 内で、會議は最も重要な學術

論文検討其の他のプログラムに入る。各分科は

### 第 1 部

A1. 天 文 學	科長 J. S. Plaskett 氏
A2. 測地學と地理學	„ N. J. Ogilvie 氏
A3. 地質學と礦物資源	„ S. J. Schofield 氏
A4. 氣象學と地磁氣學	„ J. Patterson 氏
A5. 海 洋 學	„ C. Frazer 氏
A6. 無 線 學	„ A. S. Eve 氏
A7. 地震學と火山學	„ E. A. Hodgson 氏

### 第 2 部

B1. 農 學	科長 F. M. Clement 氏
B2. 人 類 學	„ D. Jenness 氏
B3. 動物病理學	„ E. A. Bruce 氏
B4. 植物學と植物病理學	„ A. H. Hutchinson 氏
B5. 昆 蟲 學	„ G. J. Spencer 氏
B6. 漁 撈 學	„ R. E. Förster 氏
B7. 森 林 學	„ P. Z. Caverhill 氏
B8. 公 衆 衛 生	
B9. 動 物 學	„ W. A. Clemens 氏

こういふ風に各學科について研究討議が行はれたほか、

Symposium として、

Congress Symposium 第1回〔前掲六月3日午前9時〕

„	„	第2回〔六月5日午前9時〕
„	„	第3回〔 „ 7日 „ 〕
„	„	第4回〔 „ 9日 „ 〕
„	„	第5回〔 „ 10日 „ 〕
„	„	第6回〔 „ 12日 „ 〕

各部の Symposium として

第1部 Symposium 〔六月6日午前9時〕

第2部 „ 〔 „ 8日 „ 〕

又、通俗講演として、一般社會人士の公開のものは、

Popular Lecture 第1回〔六月8日午後8時〕 A. S. Eve 氏, “Cycles in Nature and Human Affairs.”

„ „ 第2回〔 „ 12日 „ 〕 A. L. Day 氏, “Yellowstone National Park.”

„ „ 臨時〔 „ 13日午前11時〕 D. Black 氏 “Peking Man”



尚ほ、上述の外、下の二件は學術上甚だ興味深いものであつた。

六月5日午前10時、英京 London より Royal Society 會長 Rutherford 卿と本會長 Tory 氏との會話挨拶放送

六月6, 7, 8日の午後、ワシントン大學研究船 Catalyst 參觀。

### 代員たちのための饗應としては

六月1日正午	Empress Hotel にて	B. C. 州主催の午餐會。
„ 2日 „	„	Victoria 市主催の午餐會。
„ 3日午後3時	B. C. 州知事官邸にて	園遊會。
六月5日正午	Hotel Vancouver にて	貿易協會主催の午餐會。
„ „ „	„	カナダ婦人クラブ主催の午餐會（婦人に限る）
„ 6日正午		Rotary Club 主催の午餐會。
„ „ „	„	婦人のための午餐會（婦人に限る）
„ 8日正午	„	Kiwani Club 主催の午餐會
„ „ „	„	帝國婦人義勇團主催の午餐會（婦人に限る）
„ „ 午後6時	市内Lよしの7にて	日本人會主催の歡迎會（日本代表のため）
„ 9日正午	Hotel Vancouver にて	カナダ Club 主催の午餐會
„ „ „	„	大學婦人クラブ主催の午餐會（婦人に限る）
„ „ 午後9時	„	Vancouver 市民有志主催の晚餐會
„ 13日正午	„	Japan Society 主催の午餐會（日本代表のため）
„ „ 午後3時	B. C. 大學にて	大學記念祝會

### Excursion は

六月 1日午後1時	Victoria 天文臺及び Butchart Garden へ
„ 2日 „ 8時	州議院内の Provincial Archives へ
„ 4日全日	S. S. Princess Louise にて
„ 5日午後4時	Vancouver 市内 Little Mountain 及び住宅區域へ
„ 7日午後2時	C. P. R. 社の厚意にて Vancouver 港の見學
„ 8日午後4時半	Stanley Park へドライブ
„ 9日 „ „	北部海岸ドライブ
„ 10日午後2時	Capilano Canyon 及び Grouse Mountain へドライブ
„ 11日 „ 1時より	U. S. S. Co. の厚意にて Howe Sound へ週航

- „ 12日 „ „ 海岸をドライブして Can. West. Lumber Co. 工場へ  
 „ 13日午後3時 B. C. 大學へ  
 „ 14日夜より17日まで Canadian Rockies へ旅行

## ( 6 )

太平洋學術會議の天文部は、J. S. Plaskett 博士を部長とし、C. S. Beals 氏を幹事として、次の五回にわたり、Hotel Vancouver の第112號室で部會が開會された。

**第1回部會** (天文學部氣象學部及び地磁氣學部の聯合部會) 六月5日午後2時 座長 E. H. Bowie 氏

- 論文 1. W. S. Adams 氏, The sun as a variable star (變星としての我が太陽).  
 „ 2. C. G. Abbot 氏, Smithsonian researches on solar radiation (太陽輻射に関するスミソン學院の研究).——W. E. Harper 氏代讀.  
 „ 3. J. Patterson 氏, Solar activity and terrestrial magnetism (太陽活動と地磁氣).  
 „ 4. E. Pettit 氏, Ultra-violet solar radiation (太陽の紫外輻射線)——W. S. Adams 氏代讀.

討論 山本一清氏, On the index of solar activity (太陽活動の指數について)

**第2回部會** (天文學部及び無線學部の聯合部會) 六月6日午後2時 座長 Frigon 氏

- 論文 1. A. S. Eve 氏, Review on determinations of Kennelly-Heaviside layers. (ケネリ・ヘビサイド層の高さの決定法通覽)  
 „ 2. H. T. Stetson 氏, Radio reception and the sun-spot cycle. (無線電話電信と太陽黒點週期)——J. S. Plaskett 氏代讀.  
 „ 3. C. S. Beals 氏, Audibility of the aurora and its appearance at low atmospheric levels. (オーロラの可聴性と、低空に於ける出現)

**第3回部會** (純天文學論文) 六月8日午後2時 座長 R. G. Aitken 氏

- 論文 1. P. W. Merrill 氏, The distribution in spectral type and galactic position of stars with atmospheres of glowing hydrogen. (發光水素の大氣を含有する恒星の分光型及び銀河座標の分布)——W. S. Adams 氏代讀.  
 „ 2. W. S. Adams 氏, Observation of the oxygen bands in the atmosphere of Mars. (火星の大氣中の酸素帶の觀測)  
 „ 3. C. S. Beals 氏, The classification of Wolf-Rayet stars. (ワルフ・ライエ星の分類)  
 „ 4. J. S. Plaskett, 及 J. A. Pearce 兩氏, An analysis of the motions of 849 Class O to B7 stars. (849個のO乃至B7型星の分析)

- „ 5. W. E. Harper 氏, Systematic velocity differences at Victoria. (ギクトリヤ天文臺で觀測せる系統的視線速度差)
- „ 6. 山本一清氏, Observations of Leonid meteors in Japan. (日本に於ける獅子座流星群の觀測)

**第4回分科會** 六月9日午後2時 (各天文臺の狀況報告) 座長 J. S. Plaskett 氏

- 論文 1. 山本一清氏, On the astronomical topics in the Pacific Sciences Congresses. (太平洋學術會議に於ける天文論題について)
- 報告 1. W. B. Rimmer 氏, Australia の諸天文臺——W. E. Harper 氏代讀.
- „ 2. 平山信氏, 日本の諸天文臺——山本一清氏代讀.
- „ 3. W. S. Adams 氏, Mt. Wilson Observatory (キルソン山天文臺).
- „ 4. R. G. Aitken 氏, Lick Observatory (リク天文臺).
- „ 5. J. S. Plaskett 氏, Dominion Astrophysical Observatory, Victoria. (ギクトリヤ天文臺).

**第5回分科會 (國際經度觀測)** 六月12日午後8時 座長 J. S. Plaskett 氏

- 論文 1. R. M. Stewart 氏, The northern belt of international longitudes. (國際經度觀測の北部帶).
- „ 2. M. Perrier 將軍, Plans for the next international longitude campaign. (次の國際經度觀測計畫).
- „ 3. C. C. Smith 氏, Velocity of radio signals in the 1926 international longitude operations. (1926年の國際經度觀測に於ける無線信號の速度)
- „ 4. 早乙女清房氏, The earthquakes and their effects on clocks. (地震が時計に及ぼす影響)——山本一清氏代讀.
- 討論 山本一清氏, On the importance of the topic and on the plan at Kwasan Observatory. (主題の重要性和花山天文臺に於ける計畫).

尙ほ、此のほか、測地學其の他の部會に於いて、多少天文關係の論文が讀まれたやうであるが、自分獨りでは、忙はしくて、其れ等に出席は出来なかつた。只、六月6日午後2時よりの測地學部會には、かねて依頼を受けてゐたため、暫く天文部會から中座して、こちらへ出席し、

橋元昌矣氏, Wireless longitude observations in Japan (日本に於ける無線經度觀測)——山本一清氏代讀.

を代讀した。

他の部會も同様であつたが、天文學部に於いても、正式の代表は可なりに少なかつた。天文家としては、米國キルソン山天文臺長 W. S. Adams氏、同

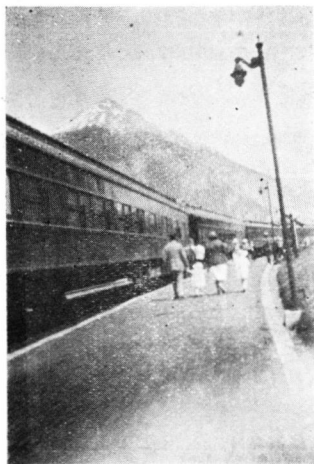
じくrik天文臺長 R. G. Aitken 氏、日本からは自分、此れだけが「外國代表」であつたから、主人側のカナダの井クトリヤ天文臺からは J. S. Plaskett 臺長を始めとし、W. E. Harper 氏、C. S. Beals 氏、F. S. Hogg 氏夫妻等が出席して、會を賑はしてゐた。しかし、傍聴者は常に多かつた。傍聴者と言ってもそれは天文以外の代表員だとか、カナダの諸所の高等専門學校や大學等の理科學教師たちが主なるものであつて、新聞記者も二三人は見えてゐたが、とにかく、天文學部は、論文題目などに人々の興味をそゝるものが一般に多いものだから、(第五回の、國際經度觀測の部會にすら、) 意外と思はれるまでに學界俗界からの出席者で賑はつた。(他の部會には、傍聴者を入れても尙ほ、四五人に過ぎないものがあつた。)

## ( 7 )

太平洋學術會議は、豫定の如く六月14日を以つて終了した。最後の日(14日)の夕刻、Hotel Vancouver の大食堂で「別れの大夜會」が開かれたが、其の二三日前から既に各部の代表者たちの中には、他の要務其の他のため、退去する人があつて、會議全體の氣分は『もはやクライマックスは過ぎ去つた』といふ淋しさの感じが伺はれた。自分も、19日からの米國シカゴ市に於ける學術會合のプログラムが氣にかゝつて、成るべく早く彼地に着きたい心があつたため、14日の「大夜會」は割愛して、其の日の午後2時45分、Canadian Pacific R.R. の急行 “Soo-Dominion” 列車に乗つて、Vancouver を出發した。——列車中には、恰も同じ太平洋學術會議に Philippine から代表として出席した Kepetti 師が乗つてゐられたため、良い道連れを喜び合つたが、しかし、一般に乗客は極めて少數で、其のため、かへつて、汽車が提供するあらゆるサービスを100%以上に享受することが出來たのは、幸ひであつた。

汽車は Vancouver を出發した翌日の朝早くロッキ山脈の奥深く分け入り、午後に至るまで、有名な Canadian Rockies の、眼も醒めるやうな美景を窓外に送迎した。大小氷河の景觀は、十年前、歐洲スキスの本場で一通り以上見たのであるし、又、氷河の學理や鑑別等については、ツイ昨日までの學術會議を機縁として、専門の地質學者たちから多少の豫備知識を獲てゐた。ホヤ

ホヤの自分ではあつたが、さて茲に、言語に絶した氷河の 實景を眼のあたり



ロキ 1 山 中

見て、今更ながら大自然のメカニズムの雄大なのを感じると共に、スミスに比し、此の Canadian Rockies が少しも見劣りのしないことを發見し、カナダ人が時々誇らしげに「スミスへ行くには及ばない美觀」と呼ぶ眞意も了解し得たわけである。氷河の山々の景の中でも、Glacier あたりから、分水嶺を越えて、Castle Mountain あたり、それから Banff の驛に着くまでは、珍奇な山と水の景を汽車の兩側の窓から眺めるのに忙はしかつた。

Banff 通過が午後2時25分、Calgary 驛が午後4時45分、——それから後は、山の景色が刻々に去り行き、大陸の平原が之れに代つて、甚だ單調となつて了つた。と同時に、いつの間にか、長く身體に馴れた冷涼の氣候から、にはかに暑熱の世界へ運ばれて來たことを感じた。

六月16日早朝に Moose Jaw を過ぎ、午後1時10分 North Portal 着。こゝで愈々カナダと米國との境界を越え、時刻も亦 Mountain Time から Central Time に變更、2時50分に N. D. 州 Portal 驛を出發した。此の日の暑さは酷烈を極め、午後には104°Fとなつたと、地方新聞は報じてゐた。

六月17日朝、6時55分 Minneapolis を通過、7時35分 St. Paul 着。自分は此所に一旦下車。かねての計劃により、Minnesota 大學天文臺に W. J. Luyten 教授を訪ね、尚ほ序でがあれば、Northfield 市の Carlton College に Goodsell 天文臺を訪ねたいと思ひ、取敢へず、ステーションから Luyten 氏宅へ電話をかけたところ、Summer School のため Campus へ行つて不在との返事に可なり失望し、それに、暑さに閉口し、急に豫定を變更、今乗つた列車に又乗りついで、一路シカゴへ向ふことにした。汽車は、こゝで70分間停車してゐたのである。

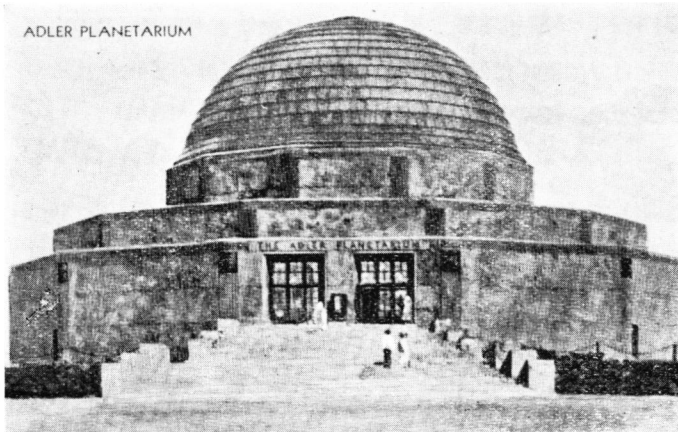
汽車は Wisconsin の廣野を走る。午後3時半 Madison 市と其の湖畔を通

過。丁度十年前の春の一日、英子と共に Williams Bay から招かれて此の美しい學都に J. Stebbins 教授と其の天文臺を訪ねたことを想ひ起した。午後5時頃、Beloit 附近を走る車の中から東を見て、Yerkes 天文臺の大ドームが見えないのかと焦つたが、見えなかつた。

午後7時05分、シカゴ N.W. 停車場に着。直ちにタクシーを雇つて、E.36th Str. の J. Y. M. C. I. に島津氏を訪ね、暫く御厄介になることにした。

（ 8 ）

シカゴの市は、今、世界大博覽會の開會中で、晝夜の區別なく賑はつてゐる。全米の人々は、極端な Depression の世の中に、此の大博覽會を支持應援して、總ての人が必らず一度はシカゴを訪れ、シカゴ市を賑はし、其の博覽會を景氣附け、ひいては國全體の景氣を盛り返さうとつとめてゐる。19日から開かれる A.A.A.S. の會合も、勿論、此の大計劃の一つであるのだが、五千や八千の人々が集る會合は、絶えず此のシカゴ市の此所彼所で今開かれてゐるので、空前の學會も、大して社會の注意を呼んでゐないらしく見える！



シカゴのプラネタリウム

自分がシカゴへ着いた翌18日は日曜日なので、まづシカゴ市内の現況を見るため、朝から宿を出で、第12街の正門から大博覽會に入場、構内を歩きまはるうち、かねての憧れのプラネタリウムを訪れた。アウよくば館長 Ph. Fox 博士に久しぶりで會ひたいと思つたのが、幸ひに成功し、大きい手で迎えら

れたばかりでなく、館の内外の、未だ一般に開いてゐない Museum の中まで見せられ、それから、導かれるがまゝに、大ホール内の有名な投影機の下に席を與へられ、一般入場者が聞く通俗講義を約一時間傍聴した。

ツァイス製の此のプラネタリウムといふものは、十年前の自分の外遊中には、ドイツにさへ無かつたものであるが、1925—6年頃から急にドイツの各都市に作られ、其の後、外の國にも紹介されて、歐洲ではポーン、ローマ、モスクワ等に、又、米國では此のシカゴに作られた。元來、昔から言ひ古されてゐる Planetarium といふ語は、「遊星儀」と譯すべきもので、太陽をめぐる各遊星の運行を模型にしたもの、即ち、正確には、東京の五藤氏が持つてゐられるものが本統の「プラネタリウム」なのである。獨國ツァイス會社で1925年以來作り始めたものは、要するに非常に複雑な幻燈器なのであつて、遊星ばかりでなく、多くの恒星と其等の運動をも映寫し、全體の機構が、大に、雄且つ正確精密に出來てゐる。全く、傳統を忘れた「モダン型」である。この新型プラネタリウムを我が日本へ最初に紹介説明したのは自分であつて「天界」第74號と、科學知識第 一號とに記述したことがある。こうして、構造と其の原理を自分は既に熟知してゐるのであるが、其の實物を見るのは此の日が始めてだと、誠に奇妙な因縁と言はねばならない。

シカゴの此のプラネタリウムは、一通り其の實物と使用ぶりとを見て、すつかり感服して了つた。今までは、時々、人から、「巨萬の費用をかけて、天體運行の模型を見るよりも、やはり、望遠鏡により天體の實景を見る方が好いじゃないか!!」といふ批評を聞かされる場合に、自分も可なり其の意見に共鳴してゐたものであつた。しかるに、こんど、プラネタリウムを眼のあたりに見て、其のスバラシイ能力を知るに及び、上述の批評は單に机上の論に過ぎないものであることを覺えた。何しろ、複雑なスイッチ板を開閉することによつて、場所や季節の如何を問はず、眼に見えるあらゆる天象を、過去未來共に幾百年前後にわたつて、表はすことが出来るのだから、學俗の別なく、之れを驚嘆するのは尤もな話である。

此の日を始め、七月中頃までのシカゴ市滞在中、自分は 大博覽會に幾度と

なく入場した。そして、“Century of Progress”といふ名に應はしい陳列館の數々を見た。中にも、理學館、電氣館、交通館等は、誰でもの心を惹きつける内容を十分に持つてゐたと言つて好い。其の他、あらゆる廣告、新案、娛樂等々が、新しく湖岸を埋め立てた長さ9マイルの地積に配置され、晝夜を問はず、老若男女を吞吐してゐる有様は、今の世に、誠に珍らしい不景氣知らずの狀景であつた。（續く）

× × × × × ×

## 天 界 が 新 装 す る !!

「近い將來」に、我が天界は、其の内容も、外觀も、すっかり變つた姿で皆様の前に現はれます。傳統は、趣味と、研究と、兩みちかけた行き方に、變りは勿論ありませんが、『それが、どうして此んな風に變り得たか？』とすべての會員や讀者を驚かせるでせう。會長の洋行みやげとも考へられるのです。

一般からの御投稿も、もちろん、歓迎します。論文や、研究は言ふに及ばず、新しく質疑應答の欄や、觀測手引き、新刊の紹介解説等々。之れ等は星を趣味とする人々のため；又、内外の學界の消息や、時事、諸方の研究の總括や、一覽類など、之れ等は主として學究者のため。

とにかく、大に待望して頂きたい。【編輯】

### 天 界 の 編 輯 規 定

- なるべく原稿用紙に、左横がきに書くこと。
- 句讀點は、日本式の。や、にせず、ロマ字の.,;等とすること。
- 字數は   ポイント活字ならば           一頁 28行,   毎行 34字,  
          6號活字で一段組みならば   同 37行,   同 40字,  
          同       二段組みならば   同 86行,   同 19字,
- 〆切は毎月月末